

精神薄弱教育史研究序説 IV

——ソビエト知能遅滞児教育学史——

渡辺 健治・津曲 裕次

はじめに

本稿は、ソビエト知能遅滞児教育史¹⁾の序章にあたる研究である。先の研究^{2), 3)}にひきつづいて、本論文では、日本の研究者によるソビエトの知能遅滞児教育史研究を対象とし、その意義、課題、方法を分析する。

1. ソビエトの知能遅滞児教育への関心の変遷

ソビエトの知能遅滞児教育への関心は、わが国の近代化の過程に特徴づけられている。障害児教育も、欧米先進国を範とし、その実践、研究の導入、紹介としてはじまった。

1848(明治17)年、手島精一は、「癡人教育説、痴者之部⁴⁾」において、米、英、仏、独等の痴者教育にふれているが、ロシアについては言及していない。この傾向は、日本における最初の白痴教育者石井亮一の「白痴児其研究及教育」⁵⁾においても同様であった。

ロシアの障害児教育を最初に日本に紹介したのは、1910(明治43)年の乙竹岩造による「低能児教育法⁶⁾」であった。乙竹において、海外事情の一つとしてロシアの「低能児教育」についての紹介がなされた後、大正末期、昭和初期には、普通教育の文献において、さかんに、ロシアの障害児教育の紹介がなされる。これは、この時点において、帝政ロシアが後進資本主義国から、世界で最初の社会主義政権の樹立により、社会体制が一変したために、その関心を引き出すための十分な条件が満たされたことによる。その関心をまとめると、①新興ソビエトの教育制度、内容、方法の進歩性を紹介し、わが国の教育界を啓発しようとするもの、②マルクス主義の立場から、資本主義国

における教育の諸矛盾の解明に寄与せんとするもの、の二つに分けられる。

前者としては、1925(大正14)年、志垣寛による「ソヴェート・ロシア新教育行⁷⁾」及び1928(昭和3)年、外務省編「ソヴィエト聯邦ノ教育⁸⁾」がある。志垣は、ソビエトの教育諸機関の一つとして、「教育治療所」(後の欠陥学研究所)を訪れ、その性格、組織、入所児の状況などを具体的に詳述している。これは、実地を訪れた記録として、今日においても貴重な文献となっている。一方、「ソヴィエト聯邦ノ教育」では、統計的に付記されているだけである。

他方、後者には、1925(大正14)年、仲宗根源和による「労農露西亞新教育の研究⁹⁾」があたる。「マルクス主義と教育との関係を考へ¹⁰⁾」という仲宗根は、「子供保護の施設一般」として、「精神的欠陥ある者」のための施設、補助学校等に言及した。この紹介は、1930(昭和5)年から、1934(昭和9)年にかけての新興教育運動¹¹⁾につながるものであった。

ソビエト社会主義教育を日本の現実社会において実現しようとした新興教育運動は、1932(昭和7)年、新興教育同盟準備会運動方針の行動綱領において、勤労児童、欠食児童の教育保障とともに、「虚弱児童、浮浪児童、精神薄弱等特殊児童のための教育機関の完備¹²⁾」という項目を加えた。

しかし、こうした運動も、軍国主義体制下における弾圧によって崩壊する。そして、戦争へ向けての軍国主義体制下において、ソビエトに関する研究は困難になり、1934(昭和9)年に、ベ・ペ・ポチャピン著「欠陥児の教育¹³⁾」が翻訳されただけとなる。

戦後、日本の教育は、アメリカ主導の下で展開

されるが、障害児教育においてもそれは例外ではなかった。これに対し、ソビエト教育学の研究者矢川徳光が、1950(昭和25)年「新教育への批判¹⁴⁾」と「ソビエト教育学の展開¹⁵⁾」を著した。矢川は後者において、知能テストの禁止にふれ、歴史的にソビエトの障害児教育、特に知能遅滞児教育に大きな変革をもたらした児童学批判に言及した。これらの指摘は、日本の障害児教育の諸問題とも密接な関連をもつものであったが、この時期の障害児教育研究は、主としてアメリカの研究が中心であり、矢川らの問題提起に対応した動きは見られなかった。

戦後も1950(昭和29)年代になると、山本五郎の「ソビエトの特殊教育¹⁶⁾」(1954)、松野豊の「ソビエトにおける精神薄弱児の研究¹⁷⁾」(1960)山口薫の「モスクワ大学ルリヤ教授との会見記¹⁸⁾」(1962)、ルリヤ編山口・斎藤他訳の「精神薄弱児¹⁹⁾」(1962)など、ソビエト障害児教育についての紹介、研究がさかんとなった。こうしたなかからソビエトの知能遅滞児教育の歴史研究がはじまるのである。

2 ソビエト知能遅滞児教育史研究の展開

ソビエトの知能遅滞児教育史の研究がおこなわれるのは、1960年代に入ってからであった。それは、上述の流れと、日本における精神薄弱教育史研究の本格化によっていた²⁰⁾。

わが国の最初のソビエト障害児教育史研究は、1964(昭和39)年の菅田洋一郎による「ソビエト精神薄弱教育史一序説²¹⁾」であった。菅田は、歴史研究の意義として、資本主義国と社会主義国の体制間の相違から、ソビエトの研究は、日本の精神薄弱教育の位置づけに世界的視野をもたらすという点をあげている。時期区分として、Ⅰ、国民教育制度への精薄教育の包摂(1917—1930)、Ⅱ、ソビエト的精薄教育の発生(1930—1950)、Ⅲ、科学としての精薄教育学(1950—)とし、ここではその第Ⅰ期をとりあげている。基本的な史料としては、ア・イ・ジャチコフの「40年間におけるソビエト欠陥学の発展²²⁾」を使用しているが、これは、欠陥学史である。したがって、菅田は、これ以外の史料をも使用して、精神薄弱教育という障

害別通史を構想した。しかし、史料という点では、いずれも二次史料であり、この菅田が直面した史料入手の困難性は、今日もなお残っている。

菅田に続く研究には、1969(昭和44)年の飯野節夫の「ソビエトにおける欠陥学の歴史²³⁾」が挙げられる。これは学説史を構想したものであったが、歴史研究に不可欠な史料の典拠の明示、研究の意義、時期区分に欠け、菅田の研究から後退するものであった。

同年、関口、藤本による「欠陥学ノート(Ⅰ)—ヴィゴツキーの知能遅滞児観²⁴⁾」のなかで、歴史的記述がなされた。これも、学説史の形をとっており、欠陥学理論の体系的把握を試みている。関口、藤本は、当時の全国障害者問題研究会の研究運動に言及しつつ、その問題意識のもとに、ソビエト欠陥学の歴史的研究が、日本の現状を理解するにあたって、きわめて示唆的であるとのべている。構成では、前半に欠陥学史上の出来事を列挙し、後半に、それに貢献したヴィゴツキーの理論の分析をおこなっている。時期区分としては、Ⅰ、成立期(1917—36)、Ⅱ、清算と建設期(1936—43)、Ⅲ、組織的な欠陥学研究期、としている。しかし、この時期区分はまだ仮説の域を越えていない。特に、第Ⅰ期に関しては、様々な議論が生れる余地を残している。基本的な史料としては、菅田と同様にジャチコフが中心である。

1960年代の歴史研究が、障害別歴史、理論史であったのに対し、脇屋潤一は、1970(昭和45)年障害種別を越えた「ソビエト障害児教育成立過程の研究²⁵⁾」を著した。脇屋は、障害児教育の現状を理解し、今後の発展のために歴史研究が必要だとし、この研究の目的を、ソビエト障害児教育がどのような理念のもとに成立しつつあるかを考察することにおいた。この「成立過程」研究の意味について、脇屋は、何をもって成立したと決定するのかは難しいとして²⁶⁾、ソビエトの障害児教育は現在でも成立の過程にあるとしている。構成としては、革命前から1930年に至る通史の形態をとり、革命前と社会主義革命後の二期に分け、前者を扶助養育施設での教育と特殊学校での教育を中心とし、後者を革命後から1920年まで、1920年代、1930年代のⅢ期に分けて特殊学校に関する制度を

中心に叙述している。これまでのソビエト障害児教育に関する歴史研究においては、革命前のロシアの事情についてはほとんどふれられていなかったが、脇屋によってはじめて、帝政ロシアからロシア革命までの歴史が明らかになった。いわゆる通史的試みのはじまりといえる。

脇屋の基本史料は、ジャチコフの「異常児の養育と教授のソビエトシステムの基本的発展段階²⁷⁾」である。この論文は、菅田や関口らが使用した論文よりも、より体系的なものであり、ジャチコフ自身の歴史研究の総まとめにあたるものである。しかし、このジャチコフの論文においては、革命前のことについては、あまりくわしくは述べられていない。したがって脇屋は「欠陥学小辞典²⁸⁾」など他の史料を使用して革命前の歴史を記している。脇屋自身、一次史料入手の困難なこと、したがって二次史料を基礎にして構成される研究の限界性を十分に自覚し、ここでの論文を問題の所在を探るためのブリテスト程度のものであるとしている。だが、ソビエトにおいてもいまだ障害児教育史として、革命前から革命後までの通史は試みられていないことからみて、脇屋のこの論文は高く評価され、検討されるべきものである。

1960年代に比較的盛んであったソビエトの障害児教育についての歴史的研究が1970年代初めには脇屋の論文以外には見られなかったが、1975（昭和50）年以後、再び継続的な研究が行われるようになった。1975年渡辺は「ソビエト欠陥学の形成におけるビゴツキーの役割²⁹⁾」を著した。渡辺はソビエト障害児教育研究の意義として、現在の日本の障害児教育問題が資本主義の矛盾との関連で成り立っているとし、その問題を国際的視野でとらえ、社会主義における障害児教育と比較する必要があるという比較教育的研究の意義を指摘している。そのためには、ソビエト障害児教育の歴史的経過が十分明確にされていなければならないという観点から、歴史研究を試みようとしている。歴史研究の視点としては、加藤の「下からの運動を前提とし、運動と一定の緊張、対抗関係において障害者教育に対する政策が成立する³⁰⁾」という歴史発展の観かたに対し、その視点が若干ステイタ的な捉え方であるとして「下からの運動関係相

互においてさえ、対立物の闘争としての発展がなければならぬし、政策においてさえ、政策間の対立の闘争としての発展がなければならぬ³¹⁾」という歴史発展のダイナミックな捉え方を提起している。しかし、渡辺の論文において、この視点から実証されたものは、十分なものとはいえず、いまだ仮説の域を出ていない。また、渡辺はソビエト欠陥学の成立過程研究の目的としては、次のような点をあげている。1917年の十月社会主義革命によってブルジョア階級から労働者階級が解放されても障害児教育問題は残る。その教育問題解決のために革命初期に一連の基本的・制度的基盤が構築されていくが、それは基本的・形態的なもので、障害児教育の内容、方法に及ぶものではない。障害児教育の内容、方法を科学的に確立してこそ、革命前の慈善的・博愛的思想と現実を清算し、真の意味での社会主義社会の建設が実現されるわけである。その障害児問題へのアプローチの科学的手法の創造をめざしたものが「欠陥学」である。それは後進資本主義社会から社会主義社会への変革の過程で、新しい障害者観、教育観、発達観を反映し、また資本主義国における障害者問題へのアプローチに対する批判を反映するものであった、と。

上述のような観点から、渡辺は、資本主義社会から社会主義社会への移行過程における変革を「欠陥学」を指標に検討しようとした。

方法としては、前半にソビエト欠陥学の成立過程についてが述べられ、後半に、その過程において主導的な役割を担ったエリ・コス・ビゴツキー（1896—1934）の理論が検討された。ソビエト欠陥学の成立過程の時期区分としては、第一期（1917—20）ソビエト障害児教育における基本的理念の確立期、第二期（1920—31）ソビエト欠陥学の成立期、第三期（1931—41）ソビエト欠陥学の確立と義務教育の実現期、第四期（1941—45）第二次世界大戦期という仮説を立て、第一期と第二期の研究を行なった。革命前についてもふれてはいるが、しかし、それはきわめて簡単な記述にとどまっており、脇屋の論文ほどのものではない。またソビエト欠陥学の成立過程の「成立」としては、時期的には1920年代でマルクス・レーニン主義の

弁証法的唯物論とイ・ベ・パブロフ(1849—1936)の条件反射学説が欠陥学の基礎理論に置かれたことをもって、その成立要因としている。しかし第二期に欠陥学が成立したとすれば、第三期の確立という意味が不明確であり、むしろ確立というよりは、発展として捉えることの方が妥当であろう。使用された基本的史料は、ジャチコフの「異常児の養育と教授のソビエトシステムの基本的発展段階」、ハ・エス・ザムスキーの「精神薄弱教育史³²⁾」、1917年から1973年までの教育に関する資料集、ア・ア・アバクーモフ他編「ソ連邦における国民教育、普通教育学校、資料集³³⁾」であった。この中で、ザムスキーの「精神薄弱教育史」は、これまで、ソビエトにおいても通史がなかったのに対し、世界史の中にソビエトの精神薄弱教育史を位置づけた点において注目に値するものである。

この他、ソビエト障害児教育史、欠陥学史についての研究が学会などで継続して発表されているが³⁴⁾³⁵⁾³⁶⁾、一論文として発表されたものは上述してきた通りである。

3. 考 察

日本におけるソビエト障害児教育史研究は量的に少なく、研究のたち遅れはあきらかである。それは、これまでみてきたようにソビエトの障害児教育についての関心の成立そのものに依存する面が大きかった。それは日本の近代化のあり方、つまり先進欧米諸国を範とした近代化、戦前の日本の軍国主義体制下における民主主義運動への弾圧戦後における米国の強い影響下での障害児教育の発展等に大きく依存していた。また戦後も、1960年代までは、実用的な研究が優先され、歴史的研究は後方へと退けられた。そうした中で、戦後の教育実践・研究が一定程度蓄積されると、それらの歴史過程そのものの見なおしが問われ、そうした問題を解決するための研究が要求され出した。それらの一つにソビエトの障害児教育史研究が進められた。

ソビエト知能遅滞児教育史研究の意義

これまで見てきた歴史研究では、まず第一に、

日本とソビエトにおける体制間の相違がソビエトの障害児教育史研究の意義を成り立たせているという見解があった(菅田, 1964, 渡辺, 1975)。第二には、障害児教育の現状を理解し、今後の発展のために(脇屋, 1970)というばかりでなく、ソビエトの理論を研究し、日本の現状(アメリカ主導)への批判のためにソビエトの理論の背景を研究する必要があるという見解である(関口・藤本, 1969)。それは日本の障害児教育問題が資本主義の矛盾との密接な関連で成り立っているため、その矛盾を克服するための手掛りとして不可欠な手段であるという見解(渡辺, 1975)とも関連している。しかし、上述の二点の他に、歴史研究によってあきらかにされたものも考慮しなければならない。その一つに、精神薄弱教育もまた他の社会制度と同じく、一定の歴史的条件的もとで一定の必然性をもって形成されてきたもの、すなわち、歴史的、社会的存在であるという指摘がある³⁷⁾。つまり現時点において顕在化した問題にせよ、その問題は偶然にではなく、社会的歴史的必然性をもって生じたのであり、社会的歴史的性格を有している以上、その問題の一時的な解決ではなく、長期的な展望に立った解決を試みるには、問題の社会的歴史的性格を明らかにすることが要求される。

さらに、これまでの歴史研究は、現在の障害児教育問題が一定の社会的歴史的発展において、とりわけ資本主義の成り立ちとのかかわりにおいて成立し、その延長上において発展してきたことを明らかにしたが³⁸⁾³⁹⁾、しかし、もう一つの発展形態である後進資本主義国帝政ロシアから社会主義国ソビエトへの変革過程における障害児教育の歴史発展の法則性は解明されていない⁴⁰⁾。故に、ここに資本主義型的発展形態をあきらかにするという意義とともに社会主義型的発展形態をあきらかにするという歴史研究の意義が存在する。

以上まとめるならば、①障害児教育問題そのものが社会的歴史的性格を有している故にその性格を過去、現在、未来という展望に立って明らかにすること、そのために、体制の違い社会主義国についての歴史研究が一つの有効な手段となりうるということ、②障害児教育の歴史発展の法則性を

解明することにより、現在の障害児教育問題を解明するための方法論を創造すること、③その前提として社会主義国における歴史発展の法則性を解明すること、上述の二つに含まれるが、しかし独立した研究の意義として、ソビエトにはソビエトの障害児教育の歴史があり、その歴史的事実は歴史的研究を必要としている、つまり純粋な歴史学的課題としてソビエトの障害児教育史を研究すること、等が挙げられよう。

ソビエト知能遅滞児教育史研究の課題

歴史研究の意義は、必然的に歴史研究の課題、方法を規定する。これまでみてきた研究では、大別して①障害児教育史、②その学説史としての欠陥学史、がある。前者では、菅田（1964）が革命後から1930年までの制度的に重要な法令と障害児教育関係者たちの大会についてあきらかにし、脇屋は革命前をキエフ公国（9世紀末建国）時代までさかのぼらせ、「特殊学校は一般的孤児院や普通の養育施設の子どもの中に障害児がいたことからして、進歩的思想をもつヒューマニスト教育者の手によって、自然に生まれて来たものであったと思われる。……各類型の特殊学校は、障害児と正常児が混在していた段階から、特別な取扱をうける段階に、そして付設の特殊学級に、最後に、特別の学校へという段階を通して誕生している⁴¹⁾」という特殊学校成立過程の筋道をあきらかにしている。また盲・聾児のための学校の誕生の時期は19世紀後半、知能遅滞児のための学校は20世紀初期とし、これらの学校の設立への働きかけをしたのは、修道院や教会でもなく、国家や地方自治体でもなく、進歩的教育思想をもった教育者や医師の個人的活動であったとしている。このように菅田と脇屋によって、革命前から1930年代までの障害児教育の概略は、ほぼ説明された。しかし時期的には、1930年代後半、障害児教育、特に知能遅滞児教育の発展に決定的な影響を与えた1936年の「教育人民委員部の系統における児童学的偏向について」という児童学批判以後の歴史的研究がなされていない。また脇屋による特殊学校の成立過程の図式化も若干検討されねばならない。特に、孤児院などの施設に普通児とともに障害児がいた

ということからヒューマニスト教育者の手によって、自然に生まれてきたという説明では、歴史的研究の使命を十分に果しているとはいえないであろう。つまり、知能遅滞児のための学級、学校が何故、20世紀初期に誕生し、それはどのような役割を担い、当時の社会的歴史的制約をどのようにきり崩していこうとしたのかということがあきらかにされねばならない。さらには日本における精神薄弱教育問題の成立過程について清水は、救貧施設型、感化救済施設型、民間児童保護・教育施設型、貧民学校型、医療施設型などの類型化を行っているが⁴²⁾、このような類型化により、ロシアにおける知能遅滞児教育問題の所在がより明確になるだろう。

他方、欠陥学史についての研究は、通史というよりモノグラフ的なものであり、いずれもヴィゴツキー理論を検討したものであった。確かにソビエト欠陥学という点で、ヴィゴツキー理論の研究はいっそう深められなければならないが、しかし欠陥学の成立過程研究ということでは、革命前ロシアの理論的検討が全く着手されておらず、通史の形にせよ、モノグラフの形にせよ革命前の教育論の研究が課題とされねばならない。

さらに研究の課題として、脇屋によって指摘された、施設から学校へという図式化とは別に、施設は施設として革命後も存続しつづけているし、特に障害の重い子どもは社会保障省の施設で養育されており、その歴史的研究は完全に遅れている。

これらの課題をまとめるならば、(1)知能遅滞児教育史では、通史の再検討として、革命前ロシアにおける知能遅滞児教育の成立過程研究——その場合、成立の要因としては①個人的試みにせよ、それが継続的になされたこと、②学級（病院、感化院等におけるものも含む）、学校、施設のいずれかの形態を取ったこと、③対象児に対し、つまり知的に遅れた子どもに対し、特別な教育内容、方法などが試みられたことなど、少なくともこの三点が必要条件として満たされていなければならないだろう。(2)欠陥学史としては、革命前から革命後までの発展の筋道をあきらかにすること、従って革命前ロシアにおける欠陥学は、革命後のソビ

エト欠陥学成立の前提をつくりあげただけなのか、それとも革命前に欠陥学は成立しており、その発展形態としてソビエト欠陥学が位置づけられるべきなのか、そのいずれにあたるのかの歴史的考察が課題として残されよう。

方法としては、上述のように、教育史と学説史があげられ、教育史は其中でまた、障害種別史（知能遅滞児教育史）と障害児教育史とに分けられている。欠陥学史では、前半に教育史のスタイルをとり、その教育史における画期的な事象として理論的なものを抽出し、モノグラフ的な検討がなされた。これまでのソビエトの歴史研究では、ほぼ前述の方法しかとられていない。本論では、そのテーマからして、そこでの方法は、障害種別史——知能遅滞児教育史であり、学説史との関係が問題になる。しかし、学説史を通史として成立させるには、その前提として一定程度教育史があきらかにされていなければならない。従って学説史を独立させて研究するよりも、教育史の中に包摂して検討することが現在のところ妥当であろう。そのような方法をとる場合、時代区分は、革命前を二期に、つまり、前期は孤児院や養育院に収容されていた時期を知能遅滞者問題の顕在化の時期として19世紀末まで、後期は知能遅滞児教育の成立期で、19世紀末より1917年の革命までとする。革命後は、第二次世界大戦までを四期に区分できよう。第一期は、革命期における知能遅滞児教育で、1917—1920年まで、第二期はソビエト欠陥学の成立期として、1920—1930年まで第三期は、義務教育の実施期として、1930—1936年まで第四期は、児童学の清算の時期として、1936—1941年まで。

史料批判

ロシア・ソビエトの障害児教育史研究の場合、いずれもが、史料入手の困難に遭遇している。従って、研究段階としては、未だ史料収集の時期であり、史料をいかにして入手するかの方が、上述してきた問題の中で、最も優先されるべき作業であるといえよう。これまでみてきた研究においては、ソビエトの歴史研究者ジャチコフによる研究に大きく影響を受けている。これは、ソビエトに

おける歴史研究そのものが少なく、最近までは、ジャチコフによる研究しか、体系だったものはなかったということに依存している。これまでの日本の研究者によって使用された史料以外のものとしては、ジャチコフによる学校史「特殊学校システムの発展⁴³⁾」1967年、欠陥学史としての「ソビエト欠陥学の基本的発展段階⁴⁴⁾」1968年、ザムスキーによる「重度遅滞児の保護、養育、教授の歴史⁴⁵⁾」1960年がある、また最近では、一次史料も部分的にはあるが入手されるようになった。

4. 今後の課題

日本の研究者によるソビエトの障害児教育史研究そのものが少ないということと、それらが、またソビエトの研究者の研究に大きく影響を受けていることがあきらかである。従って日本の研究者による歴史研究の問題点は、ソビエトの研究者による歴史研究の問題でもあるわけである。それ故、次の課題としては、ソビエトの研究者による歴史研究が検討されねばならない。そして、さらには津曲（1975, 1977）によってすでに研究された日本、アメリカの歴史研究の諸問題とも関連させて世界史におけるソビエト知能遅滞児教育史の研究を位置づける作業に着手することが必要であろう。

参考文献

- 1) ソビエトにおいては、知能遅滞と精神薄弱の概念が異なっている。一般に日本でいわれている精神薄弱という用語は、ソビエトにおける知能遅滞という用語に相当する。従って、本論では知能遅滞という用語を使用する。
- 2) 津曲裕次「精神薄弱教育史研究序説」東京教育大学教育学部研究紀要。21, 1975, p. 119—127.
- 3) 津曲裕次「精神薄弱教育史研究序説Ⅱ」——アメリカにおける精神薄弱教育史学史」筑波大学心身障害研究、第1巻, 1977. p. 73—81.
- 4) 手島精一「廢人教育説、痴者之部」大日本教育会雑誌。6号。1884, p. 12—13.
- 5) 石井亮一「白痴児其研究及教育」丸善 1904.
- 6) 乙竹岩造「低能児教育法」目黒書店, 1910.
- 7) 志垣寛「ソヴェート・ロシア新教育行」平凡社 1925, p. 134—150.

- 8) 「ソヴィエト聯邦ノ教育」外務省。1928.
- 9) 仲宗根源和「労働露西亞新教育の研究」弘文社 1925.
- 10) 9) と同。p. 4.
- 11) 戸崎敬子「新興教育運動における児童の権利保障思想と障害児の教育」精神薄弱問題史研究紀要, 13号 1973年。
- 12) 「新興教育同盟準備会運動方針」新興教育 9・10月号 1932, p. 19.
- 13) 竹田正直・所伸一「1930年代日本におけるソビエト教育研究」教育運動史研究 14号 1972・p. 44~60.
- 14) 矢川徳光「新教育への批判」刀江書院 1950
- 14) 矢川徳光「ソヴェト教育学の展開」春秋社 1950.
- 15) 山本五郎「ソビエトの特殊教育」児童心理と精神衛生 No. 22, 1954.
- 17) 松野豊「ソビエトにおける精神薄弱児の研究」精神薄弱児の研究 No. 21, 1960.
- 18) 山口薫「モスクワ大学ルリヤ教授との会見記」精神薄弱児研究 No. 30, 1961.
- 19) ルリヤ編 山口・斉藤他訳「精神薄弱児」三一書房 1962.
- 20) 1964年の障害児問題に対する我が国で最初の歴史研究誌「精神薄弱問題史研究紀要」の発刊はそのことを証明している。
- 21) 菅田洋一郎「ソビエト精神薄弱教育史—序説」精神薄弱問題史研究紀要 第1号 1964, p. 36—43.
- 22) Дьячков А. И. Развитие Советской Дефектологии за 40 лет. Советская Педагогика. No. 2 1958. стр. 78—89.
- 23) 飯野節雄「ソビエトにおける欠陥学の歴史」精神薄弱問題史研究紀要 第7号 1969, p. 3—10.
- 24) 関口昇・藤本文朗「欠陥学研究ノート(Ⅰ)—ヴィゴツキーの知能遅滞児観」福井大学教育学部研究紀要 1968, p. 103—121.
- 25) 脇屋潤一:「ソビエト障害児教育成立過程の研究」香川大学教育学部研究報告第一部 1970, p. 41—80.
- 26) 同上。p. 41
- 27) Дьячков А. И. Основные Этапы Развития Советской Системы Воспитания и Обучения Аномальных Детей. Специальная Школа. No. 1—6. 1967.
- 大井清吉訳「ソビエト特殊教育史」学術資料刊行会。1974. に No. 1—5 まで本訳されている。
- 28) Краткий Дефектологический Словарь. 1964.
- 29) 渡辺健治「ソビエト欠陥学の形成におけるビゴツキーの役割」東京学芸大学教育学部修士論文 1975.
- 30) 加藤康昭「盲教育史研究序説」東峰書房, 1972 p. 19.
- 31) 29) と同論文, p. 18—19.
- 32) Замский. X. С. История Олигофренопедагогики. Просвещение. М 1974.
茂木・大井・渡辺他訳「精神薄弱教育史」ミネルヴァ書房。1977.
- 33) Соста. Абакумов. А. А. Народное Образование в СССР. Общеобразовательная Школа. Сборник Документов. 1917—1973. Педагогика. 1974. 560 стр.
- 34) 大井清吉 渡辺健治「ソビエト欠陥学の成立過程に関する研究(1), (2)」日本特殊教育学会第13回大会発表論文集 1975. p. 394—397.
- 35) 大井清吉, 渡辺健治, 渡辺裕子「ソビエト欠陥学の成立過程に関する研究Ⅱ—(1)(2)(3)」日本特殊教育学会第14回大会発表論文集。1976, p. 16—21.
- 36) 大井清吉, 渡辺健治・渡辺裕子・広瀬信雄「ロシア革命と障害児教育原理の確立」日本教育学会第35回大会発表要旨集録, 1976, p. 51—52.
- 37) 津曲裕次「精神薄弱教育史の研究」精神薄弱児研究, 117号, 1968. p. 52—55.
- 38) 清水寛「近代精神薄弱教育史研究——産業革命の進行と精神薄弱児教育問題の成立——」精神薄弱問題史研究紀要, 8号, 1970, p. 47—58.
- 39) 清水寛「権利としての障害者教育の創造と『精神薄弱』教育史研究の課題」精神薄弱問題史研究紀要, 11号, 1972, p. 1—10.
- 40) 梅根悟監修「世界教育史大系33—障害児教育史」講談社。1974, においては, ソビエトの障害児教育史については, 全く触れられていない。
- 41) 25) と同論文, p. 50.
- 42) 清水寛「東京市下谷万年特殊小学校における貧児教育問題としての『精神薄弱児』教育について

て」精神薄弱問題史研究紀要, 第15号, 1964,
p. 3—30.

43) Дьячков А. И. Развитие системы специальных школ. Народное Образование. No. 10. 1967.

44) Дьячков А. И. Основные этапы развития советской дефектологии. Специальная

Школа. No. 1 1968.

45) Замский Х. С. Из истории призрения и обучения грубо отсталых детей. Под редакцией Г. М. Дульнева и М. И. Кузьмицкой. Обучение и воспитание умственно отсталых детей. М. 1960.

Summary

A study on the History of the Education for the Mentally Retarded IV —Review on the Historical Studies of the Education for the Mentally Retarded in the USSR—

Kenji Watanabe & Yuji Tsumagari.

This paper is an introduction to the history of the education for the mentally retarded in the USSR. In this paper, the studies written by Japanese researchers were analyzed from the point of the aim, subject, method of the studies.

Results were as follows ;

1. About 1960's Japanese researchers began to study history of the education for the handicapped children in the USSR. before that time had mainly concerned about the practice of the education and the clinical studies.
2. According to the aims of the historical studies, the authors found two different stands that (1) to study the history of the education for the mentally retarded in the USSR compared with in the capitalistic states, (2) to study the soviet history in order to understand the Japanese situation and to contribute to the progress of the education in Japan.
3. There were two methods in the historical studies. One was the history of the schools, laws, etc., and the other was the history of the defectology. But the both methods, should be included in the history of the education for the mentally retarded in the USSR.

The problems pointed out in this study were as follows ; (1) to review the studies about the formation process of the education for the mentally retarded in the pre-revolutionary Russia, (2) to study the defectology from prerevolution to Russian Revolution.